

時間意識と客観性

岩 野 秀 明*

はしがき

Husserl は現象学の立場から時間意識の純粹性 (内在性) を時間の意味の基礎としたが、その場合、「客観的時間」を「排去」して分析を進めながら、他方では、「現出する持続そのもの」とか「現出する事物性そのもの」(以下183ページ) とか表現されるところのある客観的な要素を「受け入れている」(同所)、すなわち時間意識の記述はある客観性は排去しながら、しかしある客観性は (まさに記述しようとしているその時間そのもの) 「受け入れる」のである。そうすると Husserl の現象学の立場に矛盾したものが感じられる。しかしそれは実際に「矛盾」かどうか。いずれにせよ、ある客観的なものを認めてかかっていることは確かであろう。

また、Husserl の「記述」の仕方の中に「客観的要素」と言うべき何かがあるように思える。時間意識の記述は、この「客観的要素」によって行なわれている。(時間の図表)

Husserl は、時間意識によって客観的時間を構成している。そこに、なんらかの意味での「循環」はないだろうか。

このような問題意識をもってもう一度 Husserl の時間意識分析を見直すことが、本稿の意図である。すなわち時間流と「客観性」の循環に焦点を当て Husserl の時間論を考察したい。^(註1)

「物」「時間」のただなかで時間流を「体験」するということ

Merleau-Ponty が「物」と「私」の関係から時間性を導こうとしたときの、その「物」と「私」という客体は、(その場合、主体も一種の「物」である、)^(註2)Husserl にあっては、時間構成的意識流によって構成されるべき「物」(Dinge) と「私」である。ここで注意すべきは、「物」が構成されると言うとき、時間的対象であるかぎりの「物」が「構成」されるのであって、「物」の本質そのものが、ましてや物そのものが、「構成」されるわけではない。したがって正確に言えば、「物」の時間的統一 (Einheiten)、すなわち、なにかが時間的変様の中で一個の同一の対象として、「物」として、現れる (erscheinen) ことが、そしてそのことのみが、構成されるのである。だから、それはまた、「内在的対象」(immanenter Gegenstand) とも言い換えられる。したがって、「論理的な意味での判断」のような「非時間的」な対象も「内在的時間的統一」に数えられる。「判断はつねに流れの性格を持つ」^(註3)と言われるゆえんである。

問題は、Husserl の内在主義にある。^(註4)すでに指摘した点は、Husserl が「世界との直接的な関わり」を、現象学的還元の方法によって、失ったことであるが、この内在主義的な結果は、はたして、Husserl の時間論にとって必要なこと・必然的なことであったか。——結論をさきに言えば、「体験」のうちには、「物」と「私」の関係がすでに含まれている。そうである以上それは必要なことではなかった。かかる「体験」

は、ある根源的な「時間」をともなつて我々の意識のうちにも現れる。そこで、「体験」だけを残すために、「客観的時間」が「排去」されたが、はたして「物」そのものも同時に排去されたであろうか。『考案』に明瞭に述べているように、「排去」ないしは、「括弧入れ」は、客観的妥当を一時括弧にいれ、停止させておくことであって、つまりあくまでも方法論的な「排去」であった。「諸超越」が、最後に「構成」ないしは「規整」（池上謙三訳）されて純化されたかたちで、言わばよみがえることで、現象学は完成する。従つて「超越」は、とどのつまり、出発点であり終点であった。問題が実在にかかわる場合、そのような現象学は、世界から出て世界に還る、と言えるわけである。そもそも「客観的時間」を「排去」するとは、「物」の時間的側面を言っているのであつて、物の実在性そのものを言っているのではない。Husserl 自身、その方法的議論では、「客観的時間に関する假定、確定、確信、のすべての完全な排去（実在するもの（Existierendem）の超越的前提の全ての）」と言つてはいる。^(註5)

しかしここで、Husserl 自身、誤解の種はまいている。「排去」すべきであるのは、あくまで「客観化された」物であり、物そのものではない。それと同様に、「排去」すべきは、「客観化された」時間であり、時間そのものではないはずである。したがつて、そのような「物」「時間」のただなかで、我々は時間流を「体験」する、といつても誤りではないであろう。

「体験」の背景のうちに、「物」と「私」との「関係」は現れている。現象学的還元の方法を取っていない M-Ponty が、この真の「関係」を保持しえたのは、かかる誤解の根源を最初から持たなかったからである。そのかわりまた彼は、客観的時間というものを持つことがないのであるが。^(註6)「体験」のうちに含まれているのは、「前客観的」な「物」であり「時間」である。このようにして我々はふたたび Merleau-Ponty の「現象学的時間論」を肯定するのであるが、しかしそれは、Husserl 自身の現象学にあつても可能

な道であつた、と確信する。

次のような問いを Husserl に発したら、彼はどうか答えるだろうか。現象学的分析が出発点としている Temporal-daten すなわち時間流が、まさに時間的なものであることが、いかにして識別されるのか。その分析は絶対的所与が与えられて、はじめて成り立つわけだが、その所与が時間的な順序をなしていることなどを、我々は、いかにして知っているのか。^(註7)——一次記憶すなわち把持志向には必ず自己能与の知覚が「先行」（vorängig）する。されば、いかにして意識はこの時間的順序を知るのか。——時間意識の無限後退の問題に Husserl は最終的にいかなる答えを与えたか。「さて流れ（絶対的流れ）は、再び対象にされなければならない、そして再びその時間を持たなければならない。そのような場合も再びこの客観性を構成する意識が必要である、しかもこの時間を構成する意識が。原理的に我々は何度も反省することができ、このようにして無限にすすむ。……」^(註8)

このような種類の問いには、現象学の立場からは、解答は不可能だろう。なぜなら、すでに指摘したように、時間流そのものは時間の中にはないのであり、時間は時間流によつてはじめて構成されるものなのだから。しかし、上のような問いが意味を持つ以上、我々はここで現象学の守備範囲の限界あるいは淵に立たされているのではないか。

Husserl は、ある箇所ですごいような発言をしている。^(註9)

「ひとは次のように反論するかもしれない。我々の現象学的時間分析のすべての過程は、経験的な假定（einer empirischen Supposition）のもとにある。ひとは言うだろう、我々は客観的時間経過を假定した上で根本においてはただ時間直観と本来的時間認識の可能性の条件を研究、ないしは自ら構成（konstruiert）したにすぎない。我々は同時に、時間関係の直観において、時間意識の経過に向けられている現象学的-反省的直観のうちにある時間与件あるいは時間順序が、実際に予め見いだされていることを、まゑ

もって仮定した、と。……」こう自問してから、述べている。「……なんらかの世界時間あるいは世界の真理、なんらかの物あるいは物の持続の真の存在を我々は、仮定したわけではない。しかし多分、我々は、現出する持続そのものを、現出する事物性そのもの等を受け入れている。これは、それを疑うことが無意味な、絶対的所与性 (absolute Gegebenheiten) である。あらかじめ仮定された現実中存在する世界時間あるいは世界の可能性そしてその認識の可能性ではなく、世界時間そのものの、物持続そのものの可能性の条件が探求されたのだ。」

ここに読み取れることは、Husserl 現象学の可能性への示唆と同時にその別解釈の可能性ではないか。「現出する事物性そのもの」とか「現出する持続そのもの」あるいは、「世界時間そのものの可能性」等の表現が、それを物語っている。

フッサールの時間流分析における時間的「遠近法」と二重連続的射影構造 (入れ子構造)

繰り返しになるけれども、Husserl は、時間流を「絶対的主観性」(die absolute Subjektivität) と呼び、その無述語性を強調した。^(註10)

「顕在性体験のうちに我々は、時間流の湧出点 (Urquellpunkt) と反響してきた時点の連続を持つ。このこと全てに名が欠けているのだ。」^(註11)

「名が欠けている」しかし、それに形式を与え、構造を与えなければ、時間意識の現象学にはならない。けれどもそれは、もはや「客観的時間」を使って記述するわけにはいかない。もう一度いえば、「経過様態」(Ablaufsmodi) を単に見いだす (vorfinden) だけでなく、記述 (beschreiben) しなければならない。^(註12)

そのために、Husserl は「時間の図表」(Diagramm der Zeit) を考案したのだが、^(註13) その「空間的遠近法」(Perspektive) との「類比」に深い意味がある。「一つになって反射して沈んでゆくある分節した過程はこのような観察を我々に強いる、この分節した過程が過去のなかに沈んでゆく際に「縮小」する、と。——これは、空間的な遠近法 (Perspektive) との類比として

の (原的時間現象のなかでの) 一種の時間的遠近法 (Perspektive) である。」^(註14)ここに時間流の記述の最も肝要な点がある。つまり空間的な構造との類比あるいはそれと同じ構造を用いて時間流の構造をも記述するという方法である。その構造は、二方向に連続したものであり、繰り返される射映である (入れ子構造)。Husserl はこの方法によって、概念的・述語的關係を記述のために持ち込むことを極力避けたと思われる。時間流は一定の「形式」(Form) をもつと言われる。^(註15)つまりこの二重連続的射映構造であるが、それは、「形式」をもつ、と言われる。しかし、それは客観的時間ではありえないから、概念的関係ではなく、ある「構造」でなければならない。

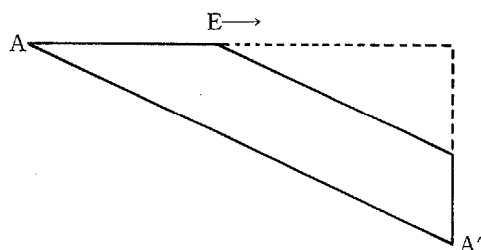
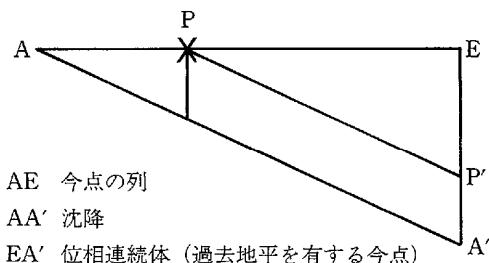
この「構造」は、たしかに客観的時間ではないけれども、つまり Husserl 的な意味では「客観的」ではないが、また別の意味で「客観的」である。それは空間的遠近法との類比であることを考えても、連続体的構造であることを考えても、入れ子的射映構造の点でも、多くの点で、「客観的」と言うことができる。つまりこのような「構造」は、きわめて一般的な構造としてすでに我々が、多くの対象において、確認しているものである。物の中に我々はすでにこの構造を見い出すのである。(たとえば、鏡の中の鏡は、入れ子的射映連続体を与える。)物と我々との交渉の中でこのような構造に我々は出会っている。だから Husserl は、この一般的な構造を時間意識という無形態な流れの中に刻印できたのである。しかもその刻印は間違っていない。別の可能性も否定できないのだが。つまり大枠においてこの入れ子的射映連続構造を維持しながら、現在を「同時性の領分」と考えることも可能であろう。この「同時性の領分」は、Husserl の時間意識に近いものだが、それにある不連続性あるいは離散性を加味するものである。

要するに時間意識の構造を考える場合は、なんらかの構想された理念をその中に投入しなければならない。それは、Husserl の場合も同様だが、「物」と「私」との関係の中で我々がすでに

獲得していたなにかであろう。それは他のあるものからの類比であることが多い。すなわち直喩である。一次元連続体にせよ、河の流れにせよ、Husserl の入れ子の射映連続構造にせよ、すべて同じそのような次元でのことである。

客観的時間の構成における二重連続射影構造の役割

このような「構造」のうえに Husserl のいわゆる「客観的」時間が構成される。次に、入れ子の射映連続「構造」から「客観的時間」への推移がどのようになされるのかを、考えてみよう。——「時間の図表」それ自体は、客観的時間を表すものではないが、客観的時間の基礎になるものであり、「内在的時間客観」(immanentes Zeitobjekt) をそのうちに位置づけることによって、直ちに時間意識が客観化されるその下地のようなものである。「経過」(Ablauf) という現象についてつぎのことが知られる。それは、不可分な統一をなしている恒常の変様の連続である、独立してありうるような[時間]幅に分離されない、独立してありうるような位相に、連続体の点に、分割されない。抽象的には取り出すことができる部分は、全体としての経過の中にのみありうる。経過連続体の位相と点も同様である。…この連続体はある意味でその形式に関して不変である。位相の連続は、同一の位相様態を二度含まない、あるいは、それはある部分幅を飛び越さない。どの時間点もいわば「個的」(individuell) であり、たがいに異なっている、それと同様に経過様態は二度現れることはない。」^(註16)この連続体を図表として表したものが次のように示されている。^(註17)



E → 他の対象により充実されることのある今の列

この二重連続体の中で、ある時間客観がある時間のあいだ持続する場合が具体的に説明される。そして「時間意識講義」第11節「根源印象と把持変様」は、この時間図表によって表される時間流をいわば質的に記述する。根源印象が把持されると、この把持そのものが、今度は今である。把持は、以前の連続的変様の全てのそのまた連続的変様である。また、こうも言われる。「原的時間野は、知覚の場合と同様に、明らかに限られている。」^(註18)すなわち時間流は、無限の広がりではない。

この把持変様の連続体は、客観的時間を容易にいわば自分の上に乗せることができる。変様の中で「同一性意識」が生じることによって、今の変様は、同時に今の同一性となる。変様連続体の中に「対象志向」^(註18)が得られ、客観化の基礎ができる。^(註19)——客観化された今、すなわち客観的な「時間点」(Zeitpunkt) は、このように見ると、確かに、入れ子の射映二重連続体のうちには、見いだされない。したがって、その構造そのものは、Husserl の意味において「客観的」ではないが、客観化の下地ではある。すなわち、入れ子の射映連続体は、客観的時間を予想して考えられたものであって、純粹に時間意識を「記述」したものではない、と言えるのではないか。そうであるとするならば、そのような構造は、さまざまな可能性をもっていることになる。古代に行なわれた、「円環」としての時間表象ですらまたその一つではないだろうか。

フッサールの難点（循環）の「同時性の領分」による克服——一つの展望

Husserl の時間流分析はたしかに時間意識の最底層を照明しているのであって、この最も Hülē 的成層をねらったことが新しい事実の発見をもたらした、と言っても間違いではないだろう。そしてその最底層のいわば存在形式として、入れ子的射映連続構造の「時間図表」を考案したことには、非常に重要な意味がある。ただここで疑問に思うことは、時間意識の最底層をそれだけ抽象的に取り出して、その構造あるいは形式を定めることが、時間というものを真にとらえることになるかどうかである。Husserl の取り出した時間意識が、一体どの様にして我々のうちに存在するようになったのか、このいわば系統発生的な問いがさらに我々の時間に対する興味をかきたてる。別の言い方をすれば、我々は、時間は運動がなければ存在しない、という Aristoteles が置いた前提にもう一度還るべきなのである。〈物〉〈運動〉〈変化〉そして〈空間〉の中にある、言わばこれら親族たちの中にしか存在しない「時間」を今度は考えるべきなのである。

言いかえれば、時間は知覚されているものがなくては考えられないものである。知覚を全く考えに入れなければ、時間は単に一つの形式にすぎず、すでに Merleau-Ponty にしたがって我々が言ったように、この形式にそって脱線するなら、そこに空虚な永遠性という幻影に出会うことになる。^(註20)運動とか、あるいは音列とかあるいは圧の感じとかを一緒に考えるとき、時間はそれらの対象のある持続として現れる。Husserl 的に言うならば、それはすでに「客観的時間」の一形態としての「持続」にほかならないのだろう。しかし私はこの「一定の持続」をもって時間の最も基本的な成層と考えることができるのではないかと、思う。そしてこの持続は意識のなかにおいて特別な意味において同時である。「持続」はそれ自体で同時存在である。このように我々は時間流から一定の幅の時間を言わば切り取って、あるいは掘いとして、それを時間の

「アトム」とする。そのうちには、物も空間も運動も全てがすでに含まれている。すなわち Husserl のように抽象的に時間流というものを考える必要はないわけである。それは Merleau-Ponty が言った「広義の現在の領分」に近いと思われるが、しかし私は「同時性の領分」とそれを特徴づけたい。この「同時性の領分」が連なって全体としての時間流が形成されている。時間流はこの「時間アトム」から構成されているのである。この「時間アトム」は、理論的にはいくらでも短くすることは、可能だが、しかし実際には、限界があり、「時間アトム」の極小値が存在するはずである。^(註21)

この点で Husserl は「連続主義」とも言いうる一面性を引きずっていたのではないかと。把持志向も、この連続性を構成することに、より多く貢献したのではないかと。実際はそれと同時に、我々のいわゆる「同時性の領分」を構成することに把持志向はその存在理由をもっているのである。我々はいわば一種の「非連続主義」をとることになる。Husserl が「連続的射映構造」を時間流に投げ入れたのに対して、我々は「非連続的アトムの射映構造」を時間流に投げ入れる。そこで、そのために同時性の意味を明瞭にすることが必要である。

フッサールの「同時性」概念及び「意識流の構成」（縦志向の役割）

Husserl は、同時性を、次のように、二つの意味で考えた。^(註22)一つは、通常の同時であり、意識のあらゆる対象は、現在において絶対的に同時である。もう一つは、Vor-zugleich、すなわち縦の同時性である。想起されることと現在の知覚、予期されることと現在の知覚は、いずれも、縦の同時性の関係をもっている。すでに言ったようにこの Vor-zugleich「前-同時」は、「同時性の領分」を考えるうえで我々が現象学から採用できる考え方である。しかし Husserl の叙述では、「持続」を記述するばあいには、この同時性は、ほとんど注目されない。その意味で Husserl の時間分析は、時間「流」にかたよっている。

つまり時間「流」のいわば前景となっている「持続」、しかもある同時性の性格を有する持続に注目すべきだ、というのが、我々の考え方である。この点に注意しながら、「同時」及び Vor-zugleich「前-同時」の概念から出発して、いわゆる「客観的時間」が、いかにして「構成」されるかを、Husserl の叙述に沿って、次に見てゆきたい。

第一の「同時」の概念は、限界はあるにしても、多くの原感覚が形式を同じくして時間的に進行していることを示すものである。Husserl の表現を借りれば、「…たくさんのが、『同時に』、完全に等しい状態で、完全に等しい段階をなして、完全に等しい Tempo で、流れている。」^(註23)これを世界時間に対応させてみれば、宇宙全体が一つの流れのように常に同じ Tempo で未来にむかって進行している、という光景である。しかも常に同じ速度で。Tempo に緩急はないのである。このような宇宙の同時進行に対応するのが、この「同時」である。これを Husserl は「諸流れの印象同時」(impressionalem Zugleich von Fluxionen)と名づけている。^(註24)この Zugleich の概念によって諸対象の間の同時性の関係が直ちに成り立つ。つまり二つの対象に我々がなんらかの仕方でも「同時に」注意を向ければ、それらの二つの対象は我々にとって同時に存在する。たとえば我々はそのようにして、音楽を聴きながら演奏家の演奏するのを見るのである。また、太陽の黒点が爆発する瞬間に手元の時計を押す。これらの心理的同時はすべて現象学的な意味で「同時」であり、現象学的な基礎を与えられる、たとえ客観的に同時とは言えなくても。(この点で、現象学による「客観的」時間の構成は、成功していないわけである。)それはともかくとして、そのようにして、通常の意味での同時性は、時間意識の「形式」の中に準備されているのである。

以上が第一の意味での「Zugleich：同時」であるが、さらに Husserl は第二の意味での「Zugleich：同時」すなわち、おそらく、以前のものと同時、という意味で、「Vor-zugleich：前-同時」を考えている。つまり原感覚の束が、第

一の意味で「同時」であるが、いま過ぎ去った原感覚とそれにかわってあらたに入ってくる原感覚とが、現象学的には、「zugleich：一緒、あるいは、同時」である。^(註25)〈a, b, c〉という音列が与えられたときに、a の Retention、R (a)、と b とは、「前-同時」であり、同様に、R (b) と c とは、「前-同時」であり、R (R (a)), R (b), c は、いずれも互いに「前-同時」である。Husserl 自身の表現によれば、『『以前の』原感覚の経過様態、以前の今意識の経過様態の連続列は、原感覚意識と『一緒』である。』^(註26)ここに第一の意味での「同時」にくわうに、この「前-同時」が定義されたわけである。「前-同時」は、「流れに沿った前-同時」(fluxionalem Vor-zugleich)と言われる。^(註27)「前-同時」は、第一に、「時間的継起」(zeitliche Folge)を可能にし、^(註28)第二に、「前-同時」は、時間意識の統一、あるいは意識流の自己同一性を可能にする。^(註29)「前-同時」は位相の射映連続の構造そのものであるから、「時間的継起」がそれによって構成されることは、あきらかであろう。第二の点、時間意識の統一あるいは時間流の自己同一性は、「時間意識講義」第39節で「意識流の構成」の問題として、特に取り上げられているものであり、例えば、音に注意を向けるなら、「横-志向」を「生きる」ことになるが、また、「縦-志向」を遂行して、その中で構成されるものに注意を向ければ、そこに再び「前-同時」なる性格をもった入れ子の射映連続構造が自覚され、それがまた、一つの志向性として統一されて、意識流そのものの構成が確立される。^(註30)それを Husserl は、「準-時間的秩序」とも、また、「前-現象的・前-内在的時間性」とも呼んでいる。^(註31)また、「一次元の準-時間的順序」ともいう。^(註32)——この「準-quasi-」と「前-」という表現で Husserl は、「客観的時間」を構成する「意識流」そのものを、示すのである。つまり「意識流」そのものは「絶対的主観性」であり、いわゆる時間的範疇はなにも属さない、それらの範疇そのものがそれによって成立するところのものだからである。——これに対して「横-志向」

によって構成されるのは、「内在的時間、客観的時間、真正の時間」であるといわれる。^(註33)「縦-志向」による「時間流」そのものの構成は、「それ自身の中での」構成であり、「流れの自己反映」(eine Selbsterscheinung des Flusses)であって、他のなにかの中での出来事ではない。^(註34)かくして Husserl は、「横-志向」と「縦-志向」(Längs-intentionalität, Quer-intentionalität)の働きを区別することによって、客観的時間と主観的時間流とを確然と対立させて、ふたつの異なる領域を設けることを意図したように思われる。

客観的時間の構成における「横-志向」の役割

「把持」が二重の働きを持つことが、すなわちそのうちの「縦-志向」の働きが、意識流の統一という概念を与えた。そこで、今度は「横-志向」のはたらきによって、「客観的時間」の構成を考える。^(註35)Husserl によると、「内在的内容」の本質には、点的ではなく、時間的延長がふくまれ、すなわち「持続」がふくまれ、そのことは、「経験的事物性」ではなくて、「内在的内容」が問題となるかぎり、まったく自明なことである。経験的事物は、事物の構成を前提するが、内在的内容は単に内在的なかぎりのそれであるから、いわば、客観的事物の存在をまだ知らないのである。この時間的延長 (zeitliche Extension) の確実性の根拠となるものを、Husserl は「知覚」と言っている。「純粹に視る知覚、持続するあるいは変化する内容のものを本来の意味で構成する知覚」^(註36)と説明し、「持続の明証意識」と言い換えて、音cを例にとり、分析を試みている。時間的に延長することが知られるためには、我々の眼前に持続する「なにか」が現れていなければならない。この「なにか」を Husserl は、「知覚の統一」「切れ目のない統一」「cの切れ目ない延長の統一」「具体的統一」「具体的個体」などと呼んでいるが、^(註37)あとで、「個体的なものの意識の本質的な形式」^(註38)という言い方をすると、それは、論理的な個体の直観的側面であ

う。(Ideen では、「個体直観」という言い方があった。) 個体の直観がなければ「時間的延長」そのものも考えられないわけである。そして全体がこの統一にいわば融け込むことを、「時間質料の区別のない等しさと時間定立的意識の様態の連続性が基礎づける (fundiert)」といわれる。そして「この具体的なものは、そのつど単に与えられたものである」とつけ加えている。^(註39)つまり分析は、あとで加えられた知的操作にほかならず、我々は単に持続あるいは時間的延長を「知覚」するのみである。

ここまでは、まだ内在的時間であるが、さらに物の構成が内在的時間の中で行われて、根本的には、時間意識の中に、客観的時間が構成される。「同じ印象意識の中に、知覚 (Wahrnehmung) と、またそれによって、知覚されるもの (Wahrgenommenes)、が構成される。このような組立の意識の本質には、内在の種類に属する統一意識であると同時に超越の種類に属する統一意識であることが、ふくまれる。」^(註40)つまり内在的統一が同時に超越的統一を伴い、それと一体となっているわけである。しかし超越的統一には内在的統一がなければ成り立たないであろう。これに対して、内在的統一は超越的統一がなくとも存在するであろう。「統一」は、あらゆる時間形式、持続・同時・時間点など、に関わってくるであろうから、すべての内在的時間形式が客観的時間に言わば転化するわけである。「内在的時間は内在的現出の中で構成される客観的時間に客観化される……」^(註41)と言われる。

詳細はここでは省くが、かくして時間は、根本的には時間流によってすべて構成され、その存在根拠をここに見いだすと言ってよいであろう。^(註42)Merleau-Ponty 的な言い方をすれば、少なくとも、時間的形式の「意味作用のゆりかご」^(註43)は、ここに見い出されるわけである。客観的な意味の証人は、時間意識である。

むすび——一つの可能性としての音楽あるいは言葉

だがしかし、時間意識そのものが、すでに客

観的時間を暗に前提してはいないだろうか。また「客観的なもの」が、純粋な時間意識の周辺にすでに位置しており、それが、時間意識にはたらきかけてはいないか。「物」と「私」の関係は時間意識の暗黙の前提ではなかったか。連続的射映構造は、そのような「関係」から Husserl が気が付かないうちに取り入れていたものではないのか。

上に見られるように、客観的時間の構成の最終的視野を開く前の段階で、Husserl は、「持続」の「知覚」ということを強調している。^(註43)ここに我々が「同時性の領分」と、以前に、言ったものが、対応している。「現在」あるいは「現前」をこの意味の「持続」と考え、それを基点として、時間を構成する道が考えられるように思われる。

Husserl もしばしばもちだしたように、時間のイメージは音楽のメロディー、音列、あるいは「音」によってきわめて適切に表現される。音楽であってもあるいは、言葉であってもよいのだが、それらの具体的な現象の中に時間流は、確かに織り込まれていることは、否定できない。だから、明らかなことは、時間は、ある歌のリズム、あるいは言葉のリズムであって、そのリズムによってメロディーが歌われ、言葉が発せられる。このような見方をとるならば、時間として我々にちかしいリズムという音楽的あるいは聴覚的構造を時間意識の中に投げ入れることができる。

このリズム感覚は、まったく前-客観的な意識の中に見い出されうるものであるから、科学的な時間意識が発生する以前に、個体発生的にも系統発生的にも存在するものである。幼児にもあるいは、原始社会にも存在するにちがいないものである。リズムには繰り返しということがその特徴として属している。時間の量的性質はこのことに基づくのではないか。Husserl 的な志向性分析では、この点があまり明瞭にならなかったように思われる。さらに、リズムは、身体運動のうえに存在する点が、「純粋」な時間「意識」との、顕著な相違である。この聴覚的かつ

行動的特徴は、時間の認識論にとって非常に重要な意味をもつであろう。時間はリズムとして存在するという、この比喩に、我々は新しい時間構成のありかたを期待することができる。

注

- 注1 本稿は1970年3月に相模工業大学紀要第4巻1号に掲載された「時間意識と主観性」の続編である。その論文の「I. 時間意識」で Husserl の分析を検討した。
- 注2 M-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, 1945 *La temporalité* (同書 p.469以下) を M-Ponty の時間論とする。
- 注3 *Zur Phänomenologie des inneren Zeitbewusstseins*. (Husserliana, X) 「時間意識講義」と略記。以下、欄外ページ付けで引用。S. 430.
- 注4 前掲論文のII. 主観性「現在」の項 参照。
- 注5 op. cit., S. 369.
- 注6 M-Ponty の時間論に関しては、前掲論文「II. 主観性」を参照されたい。
- 注7 Temporaldaten, については、op. cit., S. 371. を参照されたい。
- 注8 op. cit., S. 467.
- 注9 op. cit., S. 314., B. Ergänzende Texte Nr. 47.
- 注10 前掲論文「I. 時間意識」「意識流」を参照。
- 注11 op. cit., S. 429. 第36節。
- 注12 op. cit., S. 388.
- 注13 「時間意識講義」第10節。
- 注14 op. cit., S. 387-8
- 注15 op. cit., S. 467.
- 注16 op. cit., S. 389 「時間意識講義」第10節
- 注17 前掲論文、I. 時間意識、「構造」で、根源印象と把持志向の意味について述べたので参照されたい。
- 注18 op. cit., S. 391.
- 注18 gegenständliche Intention, op. cit., S. 418.
- 注19 前掲書第30、31節。
- 注20 前掲論文「II. 主観性」「現在」
- 注21 原吉雄訳ポール・フレス「時間の心理学」第二部第四章「時間の関」を参照。
- 注22 「時間意識講義」第38節。
- 注23 S. 431
- 注24 S. 432
- 注25 …“zugleich”, zusammen damit tritt eine neue und immer neue Urempfindung auf, … 「同時に」、それと一緒に新しい原感覚が次々にあわれる…。」S. 432.
- 注26 S. 432.
- 注27 同所
- 注28 「時間意識講義」第38節
- 注29 同書第39節
- 注30 S. 435-6
- 注31 S. 436
- 注32 S. 435
- 注33 S. 436

- 注34 S. 436-7
 注35 前掲書第41節
 注36 S. 438
 注37 S. 439
 注38 S. 440
 注39 S. 439
 注40 S. 443
 注41 S. 444
 注42 また別の論考、「時間論序説——時間・空間の結合について——」のIに「時間の客観化」についての考察があるので、参照を乞いたい。相模工業大学紀要第15巻1号 1980年7月 I. 意識から時間・空間へ（フッセルの場合）
 注43 M-Ponty op. cit., p. 492
 注43 第41節。S. 438 以下。

文献

- 注に挙げたフッサール等のテキストのほか、次のものを参照した。
 Aristoteles *Physica*
 Bachelard, Gaston *La Dialectique de la Durée* 1950 (1980)
 Dürr, Walter *Rhythm in Music : A Formal Scaffolding of Time*, in *The Voices of Time*, edited by J. T. Fraser 1966 (1981)
 Husserl, Edmund *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie* I 1913, II 1952 III 1952
 池上謙三（訳）「フッセル 纯粹現象学及現象学的哲学 考案」上下 昭和13年
 Smith, Colin (translation) *Merleau - Ponty Phenomenology of Perception* 1962
 高橋里美 「フッセルに於ける時間と意識流」「時間の意識と意識の時間性」（「全体の立場」（昭和7年）所収）
 立松弘孝（訳）「フッサール 内的時間意識の現象学」昭和43年